

サヘル地域の里山再生

2015年夏 マリ活動報告

代表 坂場 光雄

今回の派遣期間は、2015年5月22日から7月24日までの約2か月間でした。

エチオピア航空が成田空港に乗り入れたため、アジスアベバ1回乗換で、バマコに到着できました。帰りの便はバマコ発が遅れて乗り継ぎが出来ず、アジスアベバで2日待ちました。

マリの状況は、5月に南部や北部での武装勢力による襲撃事件等がありましたが、バマコ周辺は平穏でした。7月になってファナ～バマコ間の幹線道路2か所に軍の検問所が設けられ、乗合自動車、長距離バスが止められ、チェックを受けるといった様子です。

現地での主な活動内容を箇条書きに整理しましたのでご紹介します。

1. 地域苗畑

- ・6月前半は雨が少なく、カッセラでは水の購入費用が大変という話があった。苗木は枯れかかっているものが多かった。頼んでおいたアカシアセネガルの苗は6月下旬になってから育苗が始まった。昨年よりも全体に苗木の種類が少なかった。
- ・苗木を作っても管理が悪く、ヤギに食われる人がいた(マルカコンゴ村)。
- ・多くの苗畑からポットやバオバブ種子の要請があり、パン工場の袋を購入し、対応した。



アカシアセネガル苗木



萎れた苗を購入



コビリ2苗畑のバオバブ苗

2. 苗木配布

- ・配布植林した苗木は16,313本で、ユーカリが50%弱、バオバブが27%と飛びぬけている。延べ66の村・地域で行った。多くの場所では直接、村人に配布したが、雨後に配布した村(ディコムラ村、ンゴニゴ村)では、家族総出で耕作に出かけているため、夜に配るということで、苗木を小屋に保管して提供した。
- ・雨季の始まりで多くの男性は畑にでており、多くの女性から夫や家族の分の苗木の要望があり、余裕のあるときは、苗木を提供した。
- ・バマコ北部のコジャン小学校では6月末に苗木を持っていったときに、学校が休みで、苗木を小屋に入れて保管してもらった。校長に苗木の提供を知らせた。7月になって確認すると、校庭にしっかりと柵を作って植栽してあった。
- ・柵を作りたいという話があったので行ってみると、隣地との境界に植栽したいという。距離も長い。当初はアカシアセネガルを考えたが、畑の境界なので、家畜の食わないバカウ(ナンヨウアブラギリ)を植えることにした。境界といっても浅い溝が掘ってある程度で、直線ではない。とりあえず、4m間隔で植栽する(ジャンファブグー村)。
- ・しっかりした柵の所有者には柵の周辺にユーカリを補植したり、多めの苗木を提供している。うまく成長すれば、緑の拠点となり、支柱の補強にもなる。



コジャン小学校の植栽



ンゴニゴ村の苗木保管



ニアニナ村の苗木配布

3. 荒廃地試験地

- ・アリ塚に植えたアカシアセネガルは、徐々に生育して、ボリュームを増している。これまでの生育地で枯れた場所に補植と追加の植栽を行った。アカシアセネガルとニーム、バラニテス、カシヤなどを一緒に植える混植試験を行った。



樹高 2m ほどに生育



混植準備



野火での枯枝と植生の回復

4. 生垣づくり試験

- ・ファナ郊外のホテル（モテル・デ・ムレン）とタンバブゲー村で、アカシアセネガルの生垣モデルを作っており、その剪定管理を行った。高さ 1.5~2m に切りつめて、幅 2m 以上に広がった枝を整理した。トゲが鋭いので、剪定バサミ、ノコギリでていねいに切り落とした。柵としては強固で、他から材料を切ってもよいくらいの点があるが、道具が必要なことと枝の片付けの手間が大きい。



ホテルの生垣モデル



タンバブゲー村の畑の中の生垣

5. まとめ

バンブー（竹）の苗を持って村を訪問し、菜園のしっかりしているところに提供するとうとう、あちこちから声がかかり、集落の奥の方や離れた畑の中にも案内された。そこでは柵の中で野菜類とともに配布した果樹苗などが植えられているのも確認できた（テニャンブゲー村）。

時間をかけることにより、少しずつ育樹に慣れ、徐々に生育が期待できると考えている。

里山再生を实践する

榎本 肇

8月～10月にかけて2か月半、マリの現場で活動をしてきました。今回は雨期の苗木配布と共に、里山再生に取り組むために村人達を育て、共に木を植えてきました。

地域苗畑で里山再生研修

今回は、タンバブグー村から2名、ニヤマトブグー村から1名の合計3名を里山再生研修者として選抜しました。彼らをコビリ1、2の地域苗畑に連れていき、上手に「里山」を利用している現場をみて、それぞれが行う里山の再生をイメージするとともに、育苗や接ぎ木などの里山再生に必要な技術を学んでもらいました。

研修会場となったコビリ村の2つの地域苗畑は、普段はサヘルの森が苗木配布のための苗木を購入している苗畑です。コビリ村は少し深いジーシラ（雨期の水の通り道）が通り、水条件の比較的良好な場所です。2人の苗畑主、ジャラさんとサコさんは共に師弟関係で苗木を栽培している一方で、ジーシラの水環境を活かして果樹・野菜栽培や植林などを広く行っている篤農家でもあります。

研修者3名はそれぞれ積極的に質問をぶつけ、思っていたより活発で有意義な研修となりました。



接ぎ木研修

まずは生垣育成から

今年1月に研修を行ったカソマブグー村の4名を含めて7名それぞれが自身の里山で生産活動を始めています。コビリ苗畑で学んだことを村に持ち帰り、それぞれの里山にあった方法を探ります。



アカシア・セネガルの生垣作り

研修者の一人、イーサ・ジャラさんは、家畜などが入ってこないように生垣作りから始めました。通常、柵は灌木林から材を切り出して支柱を立て、枝を横に渡して作ります。近年、薪炭材を伐採し過ぎて、こうした柵の材が手に入りにくくなりました。また、数年すると劣化し、また木を切り出してきて作り直さなくてはなりません。

イーサ・ジャラさんが選択したのはアカシア・セネガルでした。その独特の刺を家畜が嫌い、また隙間ができないように、生長した枝を切ってふさぐことができるからです。子供が大きくなり手がかからなくなったので、これまでやりたかった菜園や果樹栽培ができると夢を膨らませています。

里山での生産活動

バルー・ジャラさんは、綿花を出荷して得た収入から捻出して、隣村の井戸掘り職人に井戸を掘ってもらいました。野菜・果樹栽培には水の確保は不可欠です。7名中、里山の中に井戸があるのはわずか3名で、これからそれぞれが自分達で掘削予定です。



井戸掘り職人に掘ってもらった井戸

そして、次に苗木の準備です。柵の準備ができている村人から、苗木栽培を始めました。コビリ村でも栽培されていた商品価値の高いズィズィフィス改良種やマンゴなどは特に人気の高い果樹です。バカリ・ジャラさんは、自生しているズィズィフィスの自生種を掘りだしてきて里山に植え、学んだ接ぎ木技術を活かして改良種を接いで育てようとしています。

またユーカリについても、その生長の早さとまっすぐとした幹の形状から建材として使いやすく、在来樹木の建材が手に入らなくなった今、その重要性が上がってきています。

こうした生産活動によって従来の里山を使用しなくてもある程度収入と材が手に入られようになり、それが里山再生に繋がっていきます。

サヘル森の里山再生

サヘル森はこれまで、ファナの試験地などでアリ塚植林や盛土植林など荒廃地での様々な植林方法を開発してきました。

今年は試験地でチャンガラ（薪炭材としての最良在来種）を直播したり、自生株の生育様式の調査をしたりと将来の里山再生に向けた知識や経験の蓄積を行っています。現在ある荒廃してしまった里山を薪炭材が採れるような林に再生していくことが理想ではありますが、村人たちは里山荒廃に危機感を持ってはいるものの、そこに向かっていくかといえ、収入に繋がらない活動であるため、なかなか難しいと言えます。

コビリ村で行っているように果樹・野菜栽培をしつつ、植林活動も少しずつ増やしていくというのが現実的なものかもしれません。こうして里山再生を実践していく村人が少しずつ増えていき、村全体あるいは地域全体で里山再生に取り組むようになればよいと考えています。



チャンガラ直播実生

バマコが震えた - バリ・テロ事件直後に起きたもう一つのテロ事件

日本でも大きく取り上げられた通り、11/20にマリ共和国の首都・バマコのホテルが襲撃され、22人が死亡（犯人2人含む）、一時は宿泊客・従業員170人以上が人質となりました。マリ政府軍や国連平和維持軍によりその日のうちに事件の収束を得ましたが、3月のバマコ市内のレストラン襲撃に続く首都でのテロ事件に、バマコの人々も動揺を隠せないようです。今回の事件は、3月のテロ事件を起こした「アル＝ムラビトゥーン」と8月にマリ中部の都市・セバレでホテルを襲撃した「マーシナ解放戦線」が犯行声明を出しています。

今後のマリでの活動は、マリ人スタッフを中心に続け、状況を見極めつつ判断していきます。一日も早く再び平和なマリが戻ることを祈りつつ...

細いけれど、長いつきあい

松永 健治 (会員番号 1360 番)

ちょっと不快な気分を抱えながらこの文章を書いています。

テロの危険、その対策による不自由の恐れが語られるご時世。地元のプロサッカーチーム・浦和レッズがチャンピオンシップでコケるや差別ツイートが書き込まれ...

2007年のクラブワールドカップで浦和レッズが3位決定戦でエトワール・サヘルというチュニジアのチームと激闘を繰り広げたことが懐かしく思い出されます。

僕がサヘルの会に顔を出すようになったのは東京農大の1年生だった1993年の秋ごろ。同期で研究室も同じだった工藤義治君(会員番号1421番)の誘いによるものです。なので彼の存在なしには今に至るまでの付き合いは考えられません。

いわゆる東日本大震災の年の総会で工藤君の話をして頂きましたが、これも僕が、八戸に帰って暮らしている彼の安否情報を求めたのを受け、スタッフ有志がミクシィで調べてくれたものです。

そこから始まった、細いけれども、長い付き合い。90年代半ばには農大の後輩たちと「ちゃへるの会」なる勉強会もやりましたが、会費を払ってサヘルの会会員になったのはその後くらいの頃からです。マリの現地に行くこともなく、今ではイベントや総会に出るくらいですが、行けばいつも歓迎して頂いています。大切な知人たちです。

サヘルの会からサヘルの森へ。NPO法人格取得に伴い名前は変わっても、やることは変わらないと思います。当初はもっぱら木を植えていたのが、やがて農業協力も取り入れる。いい意味での日本式なのでしょう。

サヘルの会とも関係が深い農大の先輩方が作った緑のサヘルも、植林から環境保全

や生活保障といった方面に活動を広げています。さらにアフガニスタン東部で医療支援から活動を始めたペシャワール会も、今や治山治水及び農業開発協力活動を大々的に進めています。しかしそのさきがけは、やはりサヘルの森だったと思います。

サヘルの森の本業以外でも、この会絡みで視野が広がったところもあります。林野庁や外務省が開く、市民グループや事業者の集まるイベントに、サヘルの森とともに顔を出しては多くのブースを見て回るのが習慣になりましたが、サヘルの森を始めとしたこれらの団体こそ、真の「積極的平和」の担い手だと思う次第です。

また、貴重な情報を頂いたこともあります。90年代末ごろ、今賛否が渦巻くTPP(環太平洋連携協定)の前身にも見えるMAI(多国間投資協定)を批判する文章が張り出されていたり、遺伝子組み換えへの異論の資料を頂戴したり...

近年、治安の問題で渡航期間が短くなったり、活動地域がマリ南部に移ってきたりと、気がかりも多いのですが、環境や貧困の問題への取り組みは今後も重要で有り続けるでしょう。

細くとも長く協力していくつもりです。これらの問題の解決は僕の夢でもありますので。

...会員番号は整理のための数字ではない。会員番号にはひとつづつのドラマと想いがある。今は欠番の人の思いも積み込んで、会は前に進んでいきます。(サヘルの森)

ちやへるの会

5. 東京農大工学部材料科学科 工学専攻
と申します。皆様よりお問い合わせいただき、サヘルの会を中心に、若い人、若い人と思っている人、(安ちゃん様やでもいい)で何か交流ができたというお話を伺ったことになりました。それは勉強会、イベント、その他勉強会の交流、さまざまな活動の開催の企画などを行ってみたいと思います。第一回は勉強会をかねて花見、第二回はボランティアの募集について、第三回は西アフリカの発展策でした。これからの勉強会やイベントについてはハイオオの勉強会と連携、田んぼ、緑の森、花見村に併せて、トアレグの森...
高めて、出すというものです。皆様からこれら自分の好きな活動のDOORSとドラマをその「どこでもドア」を掛け合わせた名前です。副題は「茂樹の森と未だの発展、その経緯に、話があるんだ。」です。どこでもDOORSの目的は、一つの活動で活動するよりも、集まる人々の交流の場にも提供すれば自分の力にもなるし、いろいろな情報も聞け、その国への貢献にもなるだろう。マニラですが、毎週開校が多くなり高野から大塚までと、ありそうもない感じをしているこの頃です。

機関誌サヘル39号(1995年)より

国内活動(6～11月)

< 報告会・講演会 >

- ・7/30 マリ大使館にて、駐日マリ大使に対してサヘル森の活動を説明(坂場、榎本)
- ・8/30 現地活動報告会(坂場)

< 定例活動 >

- ・6/20 ガスのエネルギーを学び、野火止用水の大ケヤキ見学
- ・7/25 武蔵野の湧水群と台地の遺跡
- ・9/19 江戸の宿場町と海辺の緑地
- ・10/17 都内唯一の都電と沿線の遊園地
- ・11/21 メタセコイアの紅葉と水郷景観

サヘルキャンプ

8月22日(土)に、横浜市瀬谷区中屋敷にある作業場でサヘルキャンプを開催しました。参加者はおとな22名、小学生3名、幼児2名の計27人でした。午前中は中屋敷地区センターにてサヘルの団体紹介やマリでの活動を紹介し、昼に作業場へ移動し皆で空き缶炊飯をしました。

今回は、桑名から福井さんがご家族で参加して下さいました。朝から青木ラフマトゥさんが瀬谷で煮込んだ「ティガダゲ(ピーナツシチュー)」と、福井ハディジャトゥさんの差し入れ「ファカフォイ(モロヘイヤを使った肉の煮込み)」で豪華なおかずになりました。空き缶炊飯で炊いた炊きたてのご飯に、美味しいマリ料理は参加者も大満足でした。

昼食後は、トゥアレグのティーパーティーを再現したり、工作をしたり、泥染めをしたり、ヘンナでボディペイントをしたりと、とにかく盛りだくさんの内容でした。お土産には参加者が自分で鉢上げしたバオバブの苗木をプレゼントしました。

現場経験者が多く集まったので、参加者も積極的にトゥアレグの人びとの暮らしやマリ的情勢について質問していました。小学生たちは焚き火が珍しかったらしく、夢中になっていました。

電気もガスも水道もないマリの暮らしをほんの少しだけ体験して、日本で当たり前だと思っていた自分たちの暮らしを見直すきっかけになりました。

No.97 2015.12 サヘル

少しでもマリの暮らしを身近に感じてもらいたいと企画しましたが、多くの方のご協力で楽しく安全にイベントを終えることができました。好評だったのでこのような野外イベントをまた開催したいと思います。

(原梓)



空き缶を使って炊飯

グローバルフェスタに出展

今年のグローバルフェスタは、10月3日(土)・4日(日)にお台場のセンタープロムナードで開催されました。馴染みのある日比谷公園からお台場へ場所が移り、客足がどうなるかと心配していましたが、グローバルフェスタ実行委員会の発表では2日間で101,300人もの方が来場したそうです。

サヘルブースにおいても、午後は目の前に人・人・人!という感じで大賑わいでした。今年は20センチほどに成長しているバオバブの苗木を持参しました。いつもはバオバブの実と種の展示のみでしたが、苗木の展示販売を行ったところ大変好評でした。

道行くお客さんたちに声をかけると「バオバブ初めて見ました!」という方が多く、興味を持って活動を聞いてくださいました。苗木は手持ちで運びましたが、1日目9本、2日目10本あっという間に完売しました(1本500円での販売)。実際にマリで植林している木を見ていただくチャンスなので来年も展示販売できればいいと考えています。

2日目のお昼にはラフマトゥさんがマリの炊き込みご飯「ジースマグンデ」を差し入れて下さり、皆で美味しく頂きました。今年は例年より多くの方がボランティアでブース運営にご協力下さいました。改めて感謝申し上げます。

(原梓)



バオバブ展示コーナーが充実

ジャパン・バードフェスティバル 2015 に出展

10月31日(土)～11月1日(日)に、千葉県我孫子市の手賀沼湖畔で開催された「ジャパン・バードフェスティバル 2015」に出展しました。

例年通り、高津コレクション?の鳥の巣(実物20種類)と泥染めなどを展示しました。鳥の巣は並べて「誰のおうちでしょう?」という巣当てクイズを行いました。また、今年はノスリ(タカの仲間)のはく製を使って「尾羽で当てたらスゴイ!」というこれまた種名当てクイズもやりました。

毎年驚かされるのですが、今回もちびっこ鳥博士が来場しました。中でも尾羽だけでノスリの種名を当てた1年生の男の子と幅5ミリの羽根からコルリの種名を言い当てた4年生には、それぞれオオルリの巣とエナガの巣を贈呈しました。(高津佳史)



エナガの巣の贈呈式

サヘルの森ホームページから スタッフブログは情報の宝庫

サヘルの森ホームページ、スタッフブログはご覧になっていますか?

スタッフブログには活動報告の他にマリでの生活の様子が豊富な写真で紹介されています。再録になりますが、ブログから興味深い記事を2つ紹介します。(高津佳史)

【自家製モリンガの葉のソース(8/15)】



モリンガの葉をソースに使った料理・バシナイリ。ソースにはピーナツバター、魚、肉も入っています。

【ジャロさんタキイ種苗の種を播く(8/18)】



苗畑を訪れると持ち主がキャベツの種播きの最中。種が入った缶には日本のタキイシードの文字が。

マリを紹介した本が出ました! 「マリを知るための58章」

マリの紹介本が出版されました。価格2000円、出版社は明石書店です。

こんなマイナーな国の本が売れるのか?と思いましたが、「~を知るための...章」というシリーズ本で130冊以上が既刊でした。



出版元のホームページによれば、西アフリカで最も豊かな歴史を持つマリの魅力を様々な角度から紹介した本とのこと。

執筆者には、本会の設立当初にお世話になった門村浩氏、嶋田義仁氏のほか、現在もマリで活動中のNPOカラの村上一枝代表のお名前も見えます。(高津佳史)

定例活動(12~2月)

12月以降の定例活動の予定です。坂場代表とぶらぶら散歩をご希望の方は、事前に事務局までご連絡下さい。

12月19日(土)10:30 集合
行徳公園・自然動物園と船堀
江戸川区の動物園と庭園のある公園
地下鉄東西線・西葛西駅北口改札

1月16日(土)10:30 集合
浅草七福神
江戸時代から行われている七福神めぐり
地下鉄銀座線・田原町駅2番ホーム前側改札(浅草郵便局側)

2月20日(土)10:30 集合
赤坂の桜町公園と青山公園
ミッドタウンに隣接する公園と青山公園
JR中央線・信濃町駅改札

リーフレットリニューアル

新しいリーフレットを同封しました!

●.....●
新・サヘルの森リーフレットでは、新たに里山再生の取り組みなどをご紹介しています。新リーフレットを使って広報協力して下さる方に、追加でリーフレットをお送りしますので必要部数などを事務局にお知らせ下さい。

リーフレット作成にあたっては(株)ネオ・コミュニケーションズさんのご協力を頂きました。ありがとうございました。

映画・禁じられた歌声

マリ北部が舞台の映画のご紹介です!

●.....●
マリ北部のトンブクトゥが舞台となった映画「禁じられた歌声(TIMBUKTU)」が12月26日(土)より渋谷の映画館「ユーロスペース」を皮切りに全国で公開の予定です。

イスラム過激派に占領された町(トンブクトゥ)は音楽も笑い声もサッカーも禁止に。紛争で自由を奪われた家族の物語です。詳しくは同封のチラシをご覧ください。

榎本肇・帰国報告会

8月7日から10月21日の約2ヶ月半、マリの現場で活動した榎本肇の帰国報告会を行います。ファナ地域で進めている里山再生の取り組みなどについてご報告します。

1月30日(土)14:00~16:00(開場13:30)
アフリカの里山を培う

ファナ地域での里山再生の取り組み
会場: JICA地球ひろば・大会議室(2F)
JR中央線・総武線市ヶ谷駅徒歩10分
参加費: 資料代として500円
定員: 24名(予約優先)

クリスマス募金のお願い



軌道に乗ってきた苗木配布と里山再生活動を支えるため、クリスマス募金へのご協力をお願いいたします。同封の振り込み用紙をご利用下さい。

会費納入にご協力ください

NPO法人『サヘルの森』はサハラ砂漠の南縁サヘル地域において植林活動を行う市民団体です。会員には機関誌『サヘル』が届きます。お申し込みは、郵便振替で下記の口座に会費をお振込みください。

- ・一般会員 年 5,000円
- ・維持会員 年 20,000円

特定非営利活動法人 サヘルの森

住所: 〒194-0013 東京都町田市原町田 1-2-3
アーベイン平本 403 (株)エコプラン内
TEL: 042-721-1601 (留守電対応)
FAX: 042-721-1704
郵便振替口座: 00170-6-115054

HP: <http://www.jca.apc.org/sahel-no-mori/>
BLOG: <http://sahelnomor.exblog.jp/>
E-mail: sahel-no-mori@jca.apc.org

機関誌『サヘル』No.97 2015年12月12日発行
発行人: 坂場光雄 / 編集: 高津佳史
